

「おふでさき」の内容

『稿本天理教教祖傳』の103頁に、「教祖は、親神の思召のまにへに、明治二年正月から筆を執って、親心の真実を書き誌された。これ後日のおふでさきと呼ぶものである。」と記されています。

「おふでさき」は、立教より32年目の明治2年から御執筆が始まって、明治15年までの13年間で書かれています。その期間は、おつとめを整えられていった時期とほぼ一致しています。つまり、お道の救済の方法論と救済の理念・教理の体系的な教示が、同時進行でなされたと申せましょう。

そして、「おふでさき」の内容には、基本的には二つの事柄が述べられています。一つは、“親神様のたすけを展開される筋道の説明”であり、もう一つは、“そのたすけに関わる人たちの心構え”を教示されるものです。そして、この二つの事柄・記述の奥にあるのが、“おつとめの完成”というテーマなのです。

それで、一つ目の方、たすけの展開の筋道については、『天理教教典』や『稿本天理教教祖傳』に、天理教の教義として記されていますから、この部分に関する「おふでさき」のお歌は、読めばそのままに理解できます。しかるに、二つ目の人々の心構え—たすけに関わる人々への教示については、

なにもかもちがはん事ハよけれども
ちがいあるなら歌でしらする (1-23)

と歌われているように、順調に進んでいることには言及されずに、間違った心遣いや行いがあったことについてのみ指摘されています。親神の思惑に沿って進んでいるのが当たり前。しかし、間違ったことはそのままに出来ないで全部指摘される。というのが底流にある方針です。平らな言い方をすれば、良いことは言わずに間違いだけを指摘されるのですから、その集積であるおふでさき本全体の印象は、かなり厳しくネガティブなものになるのです。あまり褒められずに叱責ばかりなので、普通に読めばなかなか納得できない部分が出てくるのです。

さて、その“ちがいあるなら”と間違いを叱責されている対象は、上、大社、高山、とうじん等外部から止め立て・妨害をする人々と、中山家の家族・親族の中で教祖のたすけの模様立てに反する人々の両方に及びます。その中、外部からの反対攻撃がなされる場合の理不尽さは誰の目にも明らかですから、“おふでさき”でそれに対してどれほど厳しく叱責されていても納得がいきます。しかし、中山家の家族・親族に対しての叱責については、なぜそこまで厳しく言われなければならないのか、と感ずるお歌が多いように思われるのです。

たとえば、教祖のご長男の秀司様のご結婚に関してのご指示が、「おふでさき」の第一号から出てきます。以前この連載（その13）にも書きましたが、平たく言えば、“秀司様の内縁の妻と子供を中山家から追い出して、30歳も年下のまつゑ様を正妻にせよ”と仰せられているのです。

しかし、前にも申したように、正妻のなかった秀司様が内縁の妻を持っておられても、その当時の社会情勢・習慣からいえば、さして責められるようなことではなかったと思います。

それでも「おふでさき」には、
このあくじなんぼしぶといものやどて
神がせめきりのけてみせるで (1-36)

一寸はなし正月三十日とひをきりて
をくるも神の心からとて (1-39)
これからハ心しいかりいれかへよ
あくじはろふてハかきによほふ (1-65)

と、音次郎とかのという二人の子供までもうけた女性を離別させて、年の離れたまつゑ様との結婚を迫られているのです。

しかるに、普通の我々の感覚では、“人間の常識を超えたところに信仰の境地・妙味がある”とまでの思案はついて、“内縁の妻子との家庭の幸福を奪ってまでも神の方針に従え”と言われるところまでを理解するのは、かなり難しいのではないかと思います。かく言う筆者も、この件については、正直に申して、未だにすっきりとした思いを持っていないのです。

しかし、その中、一つ確かに申せることは、普通に生活していた母子を追い出したりすれば、当時の人も後の世の者も、大いに不審に思うだろうということであり、また、それについては、せかいにハなに事するとゆうである

人のらいを神がたのしむ (1-72)

とあるように、神様も十分に承知されていたということです。

お道の教えを弘めるためには、人々に“なるほど”という思いを持たさねばならないのに、内妻を追い出すというような普通には理解しがたいことを敢えてなされている。人々が笑うようなことを敢えてされている。しかし、それはなぜかを考える。それが、この一連の結婚問題を考える上で大事なことだと思うのです。つまり、この秀司様とまつゑ様の結婚の問題の根底には、人間創造の時の道具衆の魂のお方たち、つまり、“つとめ人衆になるべき人々を元のぢばに引き寄せる”という親神様の思召しがあり、それが何よりも優先されているということでもあります。

しかるに、一方、その魂云々の問題は、人間には全く分からない世界の話であります。というより、魂の云々は親神様が司られるところであって、人間の力が及ぶところではなく、及ぼそうとするべきところではないのです。それを、人間の親子にたとえて言いますと、“なぜ僕を男(女)に産んだのか？”とか、“なぜ私は長男(末っ子)か？”などということをお親に聞いても詮のないことである。自分が男(女)に生まれた、長男(末っ子)に生まれたことの原因を問うよりも、その事実をそのまま受け入れる。そして、その与えられた立場を基盤にして、それぞれの陽気ぐらしを構築していくべしなのである。それが“魂”についてどう考えるか・関わるかの答えである。それを、「おふでさき」の冒頭で、“秀司様の結婚=つとめ人衆の魂の引き寄せ”という事柄を通して、私たちに教えてくださっているように思うのであります。

つけ加えて申しますと、“日を切っておくる”というのは、“何度もだめだと言ったのに実現しなかったから今度こそは”ということですから、つまり、親神様は、この内縁の妻を途中で追い出されたのではなく、最初から認めておられなかったのでしょうか。つまり、大事なことは自分の“いんねんの自覚”すなわち、自分のこの世での立ち位置、どういう生き方を親神様に期待されているのかを認識することである。それを、「おふでさき」の冒頭で、中山家のご家族に関する事を通してお教え下さっているように思うのであります。